

笑顔礼讃西東

上越 詩を読む会様(新潟県・上越市) 2〜3

花の会様(東京都・杉並区) 3〜4

山崎十生様(埼玉県・川口市) 5

投稿作品 6〜10

心に残った作品 10

詠み人スクラブル(一年の締めくくりに欠かせないこと) 11〜12

ニユースあれこれ 13

お客様の「リレーエッセイ」 黒川道彦様 14

新潟ぶらり／鳥屋野瀉／越後 KOME & SAKI 交流館ナジラ 15

詠み人の「リレーエッセイ」 俳人 中西夕紀様 16

# 12

December  
Vol.59

## 詠み人応援マガジン

詩歌俳柳壇ニユース



### 温古知新⑬

## 「源氏物語」4

ついに、冷泉帝に出生の秘密が知られてしまった源氏。さて、その後は……。

藤壺の死去と同じ頃、源氏の叔父である桃園式部卿宮が死去。いとこの朝顔姫君は賀茂斎院を退きます。長年朝顔姫君に想いをよせていた源氏。朝顔姫君も好意を抱いていましたが、源氏と深い仲になれば不幸になると、源氏を拒みます。雪の夜、源氏は紫上にこれまでの女性のことを話しますが、その夜源氏の夢に藤壺があらわれ、罪が知れて苦しんでいると言って源氏を恨みました。

後、源氏の息子夕霧(母・葵上)が十二歳で元服。源氏は夕霧を大学に入れ、厳しく教育します。同じ年、源氏の養女斎宮女御が中宮(秋好中宮)に立后。源氏は太政大臣に、右大将(頭中将)は内大臣に。

立后争いで源氏に敗れた内大臣は、大宮に預けている次女雲居雁を東宮妃にと期待をかけます。しかし、雲居雁は従兄弟の夕霧と密かに恋仲に。内大臣は激怒し、二人の仲を引き裂きました。

また、源氏は六条に広大な邸・六条院を完成させ、秋の町を中宮の里邸とした他、春の町に紫上の町に花散里、冬の町に明石君を迎えます。

夕顔の遺児玉鬘は母の死後、乳母と共に筑紫へ下国、美しく成長しました。肥後の豪族大夫監の強引な求婚を避け、上京する一行。初瀬詣の途中、偶然に夕顔の侍女であった、今は源氏に仕える右近に再会。源氏は玉鬘を六条院に迎え、花散里を後見に夏の町の西の対に住まわせます。

新春を迎え、六条院の華やかさを源氏と紫上は

祝い、夕暮れ時、源氏は花散里と玉鬘、明石君を訪ねました。

三月、源氏は春の町で船楽を催し、秋の町からも秋好中宮方の女房たちを招きます。翌日、秋の町で中宮による季の御読経が催され、船楽に訪れた公卿たちも引き続き参列。紫上は供養の花を贈り、中宮と和歌を贈答しました。夏になり、玉鬘の下へ兵部卿宮、髭黒右大将、柏木らから次々と求婚の文が寄せられますが、源氏は、ある夕暮れにとうとう想いを打ち明け、玉鬘は養父からの思わぬ懸想に困惑するばかりでした。

五月雨の頃、兵部卿宮から玉鬘に文が届きます。喜び勇んで六条院にやってきた兵部卿宮。源氏が放った螢の光に浮かび上がる玉鬘の美しさに心を奪われてしまいます。やがて長雨の季節に入り、物語に熱中する玉鬘に源氏は物語評論を聞かせます。

盛夏の六条院。源氏は内大臣家の息子たちに、最近内大臣家に新しく迎えられた近江の君のことを尋ねます。玉鬘を探していた内大臣でしたが、代わりに見つかった近江の君はあまりに姫君らしくなく、その処遇に思い悩みます。

近江の君の悪評を耳にした玉鬘。源氏に引き取られた幸福に、源氏に心を開いてゆきました。七月初旬、玉鬘のもとを訪れた源氏は、己の恋情を庭前に焚かせた篝火にたとえ、歌を詠みます。ちょうどそのとき、東の対では柏木たちが夕霧と合奏していました。光源氏は彼らを招き、玉鬘に密かな恋心をいざく柏木はその手を緊張させるのでした。

源氏と玉鬘の恋の行方が気になる今回は、第二十帖「朝顔」から第二十七帖「篝火」までをお届けしました。夕霧と雲居雁の行く末も気になるところですが……。次回、玉鬘と源氏に急展開が！

(古川久美子)

# 上越 詩を読む会

会長 金井九一さま

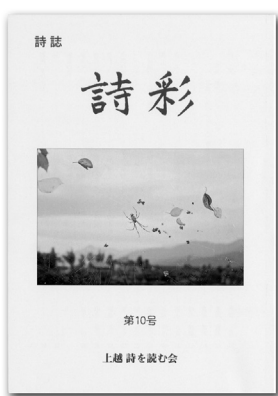
(新潟県・上越市)

去る11月12日。高田城跡地に作られ、桜で有名な高田公園。その園内にある高田図書館にて開催された、「上越 詩を読む会」の合評会にお邪魔させていただきました。「喜怒哀楽」初の詩の会です。

もともとは、詩に触れ合う講座としてスタートしたという「上越 詩を読む会」。普段は講演会などもされているのですが、今日は、先日発行された「詩彩10号」を基にした合評会とのこと。

前半は、童みどりさん、後半は魚家明子さんを司会に、まずは、会長である金井九一さんのご挨拶と連絡事項から。また、会員である森田無無さんが「日報俳壇賞」を受賞されたとのこと、賞状と共に皆様に報告がされ、受賞作

みちのくを驚いたろう初燕の発表に盛り上がります。



▲「詩彩10号」11月10日発行  
橋本八典さんの写真が素敵です

そして、合評会へ。  
始めに、作者自らが掲載順に「詩彩10号」から作品を朗読、解説。その後、参加者の皆さんによる感想や批評の発表、といった流れで進んでいきます。

牡丹

工藤紀子

今朝  
牡丹が咲きました  
大輪の白牡丹です  
辺り一面に  
いい香りが漂っています

あんまり見事で

一人で見ているのは勿体ないから  
写メールで

あなたの携帯に送ることにしました

(中略)

ひとりになるって  
こういうことだったんですね

工藤…私が言いたかったのは、最後の二行「ひとりになるって／こういうことだったのですね」という、主人が亡くなつて一人になつて、何を見ても一人、一緒に綺麗でしょう、という相手が居なくなつた、ということを書きたかつたわけです。

童…この、「白い牡丹」が活きていると思います。

金井…前回私が（牡丹の描写をもう少しと）言つたのですが、詩とは何かと考へたときに、新しい何か発見したものを描く、ということなだけけれど、タイトルを「写メール」にしたら、また違つた詩になつたかも。亡くなつた人に

写メールを送るよ、と言つたところで閉じたらどうかかなー。（一人になつたということは）敢えて書かず、牡丹が咲いたよ、写メールで送っておくからね、というところで終わつたらいいかなという気がします。

下西…私はちよつと違う感じ方ですけどね。ただ、「お仏壇の抽斗で／静かに眠つたままです」（作中…あなたの携帯は／あの日からずっと／お仏壇の抽斗で／静かに眠つたままです）が非常に素晴らしいが、配置を考えられると、もつとインパクトがあるのかなあと。言いたいことを真ん中に持つてきて、展開を変えていく方がいいかと。

新保…最後の二行を言いたかつたとおっしゃいましたね。これ、なくてもいいんじゃないかな。ここに書かなくても前の連で十分にわかる。

庭の風景

浅野 正

四角い小さな窓隔ためら  
虚ろに空を眺める蟻は

視界が余つていることも知らない

(中略)

あとから糸をいっばいに張つて  
小さな窓のテリトリーを束縛しようと  
懸命に蜘蛛の呪縛が  
地面に降り風通る土間の割れ目で  
蟻が休息する時までを食べている

浅野…いつも私の詩は訳が分からないというところで（笑）。単なる描写で終わつて、社会性のないものは書きたくないのです。説明するのは憚りがありますが、「歓迎されないムクドリ」（作



▲熱く詩を語る金井会長

中…不器用な飛び方で翼をいびつに／いつも庭に下りてくる歓迎されないムクドリの群が ついてるのは、いわゆる一般大衆ですよね。漠然とした、今の動かない社会とどう考え方と言うか。蟻は三割働かないのです。

下西…ここまで深く理解して読むのは、読み手の側の能力によるのでは、という感じがいたします。

鮮…働かない蟻が三割、あと七割は何をしているのかなあと。蟻でも兵隊アリは管理職ですよ。そっちが三割で、働くのが七割かなあと思つたのですが、人間社会もそうですよね。管理職の下に一般社員が居て、働いて動いて。そういう社会図を庭の中に入れたのかな、と考へてしまいました。

魚家…蟻なのですが、働かない蟻を集めると、七対三に分かれるんですって。働かない蟻でも働くようになる。

新保…蟻を攻撃するにはね、本体を攻撃すれば、少し残つたつて死んでしまふのですって。この詩の中で「蟻が休息する時までを食べている」という表現が面白いと思ひました。

# 笑顔礼讃西東

ささやき

童みどり

砂利山の上に

タンポポは

おひさま色をひらいている

ちかづくこと

つと

タンポポのささやき

ね、

どこでも

咲けるものよ

新保：私は、この「ささやき」の方がいい。  
森田：「ね、どこでも咲けるものよ」なんていいじゃない。  
かとう：タンポポって、あ、こんなところに咲いてるって思うようなところに咲いていたりして。強い花というイメージがあつて。ほんとにその通りだなあつて思いました。

新保：「ささやき」を読むとね、「ね、どこでも咲けるものよ」って、たいしたことないよって言っているように、そう聞こえるのです。

魚家：これからタンポポを見ると、そう思えそうですね。

童：どこでも咲きましようか(笑)。  
童さんのもう一編の詩「染まる」について

浅野：バツタは色が変わるんですね。たまたま同調したんですね。それをそのまま読んだのでしょうか。私を裏を考えてしまうからいけないんですね(笑)。

魚家：二編、セツトになっているような感じもあります。

新保：「染まる」で、気になるのは「生きるため／染まねばならない／こともある」何か人生訓の様で、感心しない。それはスケッチなのでしょうけれど自身に突き付けられているようで、その反動で「ささやき」の方が好き(笑)。



▲多才な「上越詩を読む会」の皆様

■今回紹介させていただいたのはほんの一部の方の作品ですが、皆さんそれぞれに活発な感想、意見の交換をされていて、笑いも交えつつ、終始、和やかな雰囲気が進められていました。そして博識な方ばかり！ 様々なお話も飛び出します。メモを取られる方、真剣に耳を傾ける方、それぞれにより良い作品にしようという熱意が伝わってきました。(古川久美子)

## ■事務局

〒943-0893

新潟県上越市大貫 42209-5

折笠方 魚家明子

メール：j225009@myjuen.jp

## 花の会

講師 渡辺嘉幸さま

(東京都・杉並区)

「帆船」の主宰が亡くなられた後を継いで、会の同人であり東京都現代俳句協会顧問である渡辺嘉幸さまが杉並区、千代田区、目黒区、中野区、神奈川などで指導にあたっておられる句会の一つ「花の会」へお邪魔して参りました。

本日は雑詠と兼題「雁渡し」「小鳥来る」を含む5句提出の10句選(うち特選1句)。1句目から順番に、その句を特選として選んだ方が感想を述べ、最後に講師の入選句、特選句が揚げられます。

潮入りの浪立つ港雁渡し

仁子

言い訳ではないが、内陸の生まれなので海の様子を詠みたくてもピンとこず、なかなかこのようには詠めない。わあ、うらやましいな！という感じ。



▲毎月10以上の句会以外にも予定がびっしりの渡辺講師

「潮入り」「潮騒」「浮棧橋」などという言葉を入れて句を作ってみたいという憧れがある。  
作者／伊豆大島の波浮港の近くで育った。普段、港は静かだが潮入り(＝満ち潮)になると波が大きくなってザーツと押し寄せてくる。その光景を詠んだ。

ももとせを迎える祖母や秋の虹 あさこ  
百歳を迎えられたおばあ様。「秋の虹」に喜びが出ている。  
遺骨なき同胞想ふ雁渡し 嘉幸

子ども頃、祖母がお墓の前で「この中には何も入っていないんだよ」と言っていたことを思い出したが、寂しかったのだからと、今になるとその気持ちがよくわかる。  
作者／戦争も想像できるが、これは3月の震災後のこと。仮の墓で遺骨のない葬儀をする、その光景を思い浮かべて作った。

棕渡り街路の一樹膨らます

孝子

駅前の櫟の木でこの光景を見た。黒い雲のごとくたくさんいる棕の群れが、木に吸い込まれるように飛び込んでいった。あれほどうるさかったのに、同じたたずまいであつても木の内に納まると静かになり、中に鳥が潜んでいるとは誰も気づかない。「膨らます」と言うことで、鳥が潜んでいることが感じられる。

講師／「棕渡り」ではなく、「棕の来て」の方がいい。

秋草の野となりてをり鉄路跡 史

かつては電車が往来していた路も、今は廃線となり鉄路が見えないくらいに草が茫茫と生えている、そのさみし

い様子が伝わってくる。

止り木に男の秋思深める 嘉幸

かつこい句。やっぱり男の人が多く採りますね(笑)。

作者／「止り木」ってわかる？ 居酒屋やバーのカウンターにある背の高い椅子のこと。

嘉幸先生似合いそう。でも「男の秋思」と言うからには、女の秋思とどこが違うのか、気持ちを覗いてみたくなる。

作者／俳句は説明をしたらつまらない。いろいろに想像するからいいのであって、ここから先のコメントはパスしましょう(笑)。

十字架のごとく孤りの稲架を組む 嘉幸

すこく寂しい風景だと思っていたのだ／ふつうは大勢で農作業をすることを一人では寂しいだろうなど。一人て暮らしていることが十字架？／40、50代のお嫁さんをもらつてない独身の人？作者／いろいろにとれると思うが、今回の震災の後、一人で農作業をすることがない状況を詠んだ。

稲架はざって何？／稲架は「刈取った稲を掛けわたし乾燥させるための木組み」のこと。その土地土地で言い方も異なるよう。

子の許へ古郷捨てし星月夜 ゆきえ

「一緒に住もうよ」という子どもの言葉に、故郷を捨てて上京したという、小説が書けそうな句。

作者／はい、波乱万丈な一生です(笑)。

他、会員が選んだ特選句  
生かざるると思ひけり小鳥来る 静枝  
潮騒を高めて島の雁渡し ぎく

広がりの牧草ロール雁渡し 悦子

休診の白衣干す庭小鳥来る 仁進

雁渡し浮き棧橋の軋む音 仁子

講師の選んだ特選句  
空見ればさざ波の如雁渡る 弘

「空見れば」とは言わないで「天空を」とした方がいい。

片減りの夫の庭下駄小鳥来る ふじ子  
たまゆらの風に靡ける秋桜 孝子  
湧水の光やわらか小鳥来る ゆう子  
時の鐘残る町並雁渡る ゆう子

夜の岬波すれすれに小鳥飛ぶ 弘  
いつせいに翔びたつてゆく小鳥かな ぎく  
子の許へ古郷捨てし星月夜 ゆきえ

その後、採られなかった句についても講評をいただきたいというリクエストを受け、一句一句をあたる。

雁渡し駅に佇む尼二人

「尼」とは言わず、いろいろなことを想像させた方が広がりが出る。「二人かな」とした方が男女かもしれないし、ロマンチックな感じがするでしょ。

毬栗も入りて里の宅急便

「入りて」は「交じりて」とすればいい。俳句は言葉のリズムが大切。

こまごまと母の便りや雁渡し

「雁渡る」じゃないと、「母の便り」が効いてこない。「雁渡し」と「雁渡る」を混同してしまいがちだが、「雁渡し」は雁が渡っていくのではなく、初秋から

中秋にかけて吹く荒い北風のこと。同じように「鮭風さけかぜ」は鮭が産卵のために川へ上ってくる秋の半ば頃に吹く野分に似た風のことであり、「鰯起し」は北

陸沿岸や佐渡などで鰯が回遊してくる



▲地域に根差した和やかな会でした

十一月の終わり頃から強風と共に鳴る雷のこと。

流木の磯に居座る雁渡し 鈴木真砂女

雁渡し歳月が研ぐ黒き巖 大野林火

などの句がある。

小鳥来る数の練習指を貸す

祖母か誰かが孫が手を使って計算する際に、10以上になると指を貸して計算した、という意味か。一句一章の場合、「指を貸す数の練習小鳥来る」と、季語を下5に置いた方が叙情が増す。「小鳥来る」は鴨のような中型の鳥

ではなく、ムクドリやセキレイ、シジュウカラといった小さい鳥をさす。

大空に又わき出し小鳥かな 高浜虚子  
小鳥来て何やら楽しもの忘れ 星野立子  
などの句がある。

この余生惰性で生きて小鳥来る  
そんなこと言わないで、悲しくなっ



▲句会後は、近くの喫茶店でお茶やビールや(笑)!

ちやう。余生は惰性じゃないですよ。さらに夢を持って生きましょう。それくらいのこと言わないとね!

■「みんなうまくなってきたね」「他に質問は？」と、滑舌も歯切れもよく、どんだん皆さんのその気にさせる講師の渡辺さま。85歳とは思えない、誰よりも大きく張りのあるお声で鼓舞するそのダンディなお姿と情熱はどこから？と、我が身を省みるとともに「やってみせ言つて聞かせてさせてみてほめてやらねば人は動かじ」の山本五十六の言葉を想起させるのでした。期せずして「心に残った作品」(本誌P10参照)にダントツで選ばれた作品と併せてご鑑賞ください。(木戸敦子)

# 山崎十生さま 「紫」主宰

(埼玉県・川口市)

本年11月に創立70周年を迎えた「紫」の主宰、山崎十生さま。中学時代に出版した俳句に魅せられ以来50年。その70周年に合わせてお手伝いさせていた「恋句集『恋句』」について、来し方、そしてこれからのことをお聞きしました。

## ■早い時期に俳句に出会われたのですね

中学の授業で句会をする機会があり、点がよかったという記憶があった。高校で所属していた地学部の顧問が同人誌を作っており、何となく興味を持ち、気がつけば修学旅行では俳句を作っていた。その後たまたま通りかかった公民館で俳句大会があり、どんなものかと飛び入りで参加。若い者が来たとき次回の句会にも誘われ、そこで12月のクリスマス句会だけは参加するというクリスチャンの主宰関口比良男と出会った。それが「紫」の支部「俳句遊園地」という会であり、その後も定期

的に参加し、高校を卒業する頃には、自分の生きる道は俳句だ、と決めていた。

## ■普通そんなこと思いませんか!!

どうしてそう思ったのか、おかしいね(笑)。同級生は車だタバコだと言っていたが全く興味なし。関口先生の、それまでの俳句という概念から飛び出した作品の新しさにショックを受けた。他の句会にも参加しながら、19歳のとき句集『上映中』を出した。時代の寵児、寺山修司に憧れ、家まで頼みに行き句集のしおりを書いてもらった。20代前半までは彼と同じように、詩も小説も短歌も作っていた。

## ■こういった気持ちで創作活動を?

短詩型の魅力にとりつかれたのでしようね。いろいろやってみたものの、言葉が多いほど質量が低くなる気がして、俳句ほど凝縮された力のあるものはない、俳句は五七五の核エネルギーだと思いついた。当時は活字に飢えていた時代だし、「紫」も写生俳句から新興俳句への転換期を経て、若いエネルギーが充ち満ちた沸騰期を迎えていた。その後、編集長を経て、平成10年に関口主宰が亡くなったことを受け、翌11年1月から主宰に。

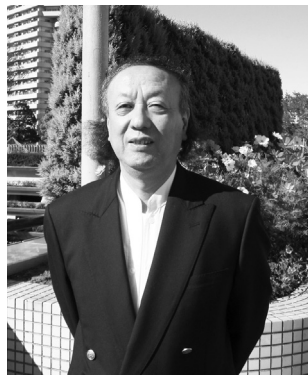
## ■主宰歴12年ですね

色々な面で皆さんが活躍し、育ってきたなど実感できることが一番うれしい。その人の持っているもの、言いたいことを画一的にならずに引き出すように心がけている。ただ、表現が伴っ

ていないだけで、皆さん私なんかよりよほど人生経験があるから初心者でも恐ろしいほど鋭い物の見方をすることがある。

## ■基本は物の見方ですか?

切り取り方。様々な切り取り方があるが、常識的だとそこで終わってしまう。そして「単純平凡なものよりちよと違うものを目指しなさい」と言うこと難しい難解なものに走る。そこは気を付けなさい。たまたまいい句は作れない。いくら大家でもみんながみんないい句ではない。著名な人ほど氷山



▲現代俳句協会理事ほか多くの要職に就き超多忙の主宰

の下には駄句が一杯あって、だからこそのいい句が浮きあがる。

## ■今回の句集『恋句』のきっかけは?

句を整理していたら恋の句が百句を超えていた。苦しいときの恋頼み(笑)。例えば席題に「紅葉」と出たら紅葉と恋でドラマを演出してみる。句集の感想に「私もいくつになってもこういう恋をしたい」などと、作品⇔実像と見るむきもあるが、あくまでも普遍的な「恋」を表現者として俳句形式で脚色しただけ。それと、句集を出すことは自分のダメさ加減を知ることでもあ

る。やっぱりダメだなー、この次は頑張ろう! とムチを打つのにいい(笑)。

## ■これからは?

理想は単純明快で奥のある句を詠みたいということだが、なかなかそれができない。来春、角川から『悠悠自適入門』という句集を出すのが、悠悠自適とは、お金があつて楽に暮らすことではない。俗世を離れ、食べ物も一日暮らす分だけがあればいいという意味合い。言葉も同様で、たくさんあつてはダメ。もう50年だが、本当のものは見えてこない。それだけ難しいからやりがいがあふれるし、氷山の一角にたどりつく過程だと思えば楽しい。あとは「紫」が次世代の展開ができるよう準備をする、それが私の仕事だと思っている。そのため、毎月各地の指導を地道に続けながら新しい力をバックアップしていきたい。

### 句集『恋句』より

初日昇りやすいやうにと抱擁解く  
爪と爪触れ合ふ根津の臘坂  
また違ふ影の重なり春障子  
ほんたうの恋は片恋霏霏と雪

★短詩型文学に精通し、かつ柔道少年でもあったという山崎さまは、ペンを持つてば寺山修司に高校四天王と言わせ、帯を締めれば川口で5本の指に入ったという多才ぶり。土日はまず不在なうえ、吟行は行っても家族旅行は行ったことがないと自嘲気味におっしゃるが、どこまでもまっすぐに一貫して自分の道を究めようとしている姿に迷いはない。(木戸敦子)



▶「恋句」は新書サイズのポケット判  
いつでも恋がポケットに!

# 投稿作品

※今月も、沢山のすばらしい作品を投稿していただきました。今後、みなさまの投稿をお待ちしております。次回掲載分は1月16日(月)必着。

## 短歌

- 1 暁方に鳴き出づる野鳥等の数減りて  
この街も風情なく都市化して来ぬ  
木暮珣子(群馬県)
- 2 おもしろいようにお金が集まるわみ  
んな当たると思つて買つているんだわ  
梅澤鳳舞(埼玉県)
- 3 ネヴ河に入り陽戯れ暮れなすむ旧き  
都のペテルブルグ 高橋邦子(高知県)
- 4 ふりさけて黒き雲雀を見んとするひ  
ばりは声のみの生さのものなるを  
北岡晃(兵庫県)
- 5 生きてきたただひたすらに生きてき  
た春のおとずれ夢に抱きて…  
阿部澄江(宮城県)
- 6 喜怒マガジン活力いつも有難う笑顔ス  
タッフ明日も青空 山本敏順(長野県)
- 7 すこしづつ役へらしゆくこの頃のすこ  
し楽しくすこし寂しく  
佐々木都(長野県)
- 8 ゴーヤ苗朝顔蔓に網取られチョットど  
けてと風に言うなり  
齋藤忠弘(千葉県)
- 9 鈴懸の並木名教え安宅の謡大いなる  
声出したいぬ 藤原昭三(滋賀県)
- 10 それぞれの色に治癒力あるといふ今  
日は風邪気味白いブラウス  
朝方夢子(神奈川県)

- 11 妻逝きて十三回の忌を修し無常迅速  
時は待たざり 佐藤茂三郎(千葉県)
- 12 「あずさ」つぎつぎすぎるホームからコ  
スモスみつ「普通」待ちおる  
篠原三郎(静岡県)
- 13 学習の成果と打ちき走り蕎麦宣伝過  
ぎしか足らずとなりぬ  
鈴木清美(愛知県)
- 14 合歓木は白雲浮ぶ秋空に捻りて薄き  
豆を干しけり 百花清(埼玉県)
- 15 鉢もて二房三房食い放題ぶどうの果  
汁あごに落ちたり土屋喜雄(山梨県)
- 16 新大関の「万里一空」てふ言葉我頂き  
て白寿目指さむ 今井忠一(東京都)
- 17 人は皆いろいろあつて今日あれば共に  
果さん己が務を 凶子利明(兵庫県)
- 18 すべてから逃れたき日々まなならず  
五十七年共に生きている  
高須孝(愛知県)
- 19 庭のユリの一輪伐りて写しいれば描  
きおへしとき花崩れ落つ  
千木良宣行(埼玉県)
- 20 花の下宴に集いし大家族いまは二脚  
の椅子あればいい 寒川靖子(香川県)
- 21 みちのくの冬の海から見つけてと三  
千八百人が呼んでる  
黒澤正行(福島県)
- 22 草むらに秋の虫たち弦を弾く針刺せ  
糸刺せ世相奏でり  
西山悌三郎(高知県)
- 23 昨日暑今朝は冷えるとつぶやきぬ五  
感に残る要介護4  
濱崎祥子(鹿児島県)
- 24 雛人形を再び飾る和の文化の古風愛  
でる重陽の節句 竹野紀子(東京都)
- 25 恙なく生きていることこそ尊けれ失いし  
ものと見えてくるものと  
吉野成行(愛知県)

- 26 少しでも星の光を与えんと校庭の木  
は都会を遮る 安部龍太(山梨県)
- 27 健診の検査結果を読みてをり基準値  
内にすべて納まる 小暮昭司(群馬県)
- 28 遠山にかすかに鳴れる風音はふと雪  
思ふ秋の侘しさ 佐藤源一(新潟県)
- 29 蟬(せみ)なきとは言えぬ胸の内そぞろ夜  
寒が足許に来る 山内寿子(京都府)
- 30 「かなしみ」の底に触れうる君であれ  
愛のある日の願い決りて  
土屋慶子(神奈川県)
- 31 病む我れの背すじのぼしてりハビりは  
笑顔いっぱい歩行訓練  
田中迪子(東京都)
- 32 日に何度言い交すだろうありがとう  
くらす片辺にゆれるコスモス  
吉澤八千代(群馬県)
- 33 富水螢田その名美しき駅近く小田急  
電車孫と見にくく  
桑原謙一(群馬県)
- 34 もう一人産み育てたく思へども原発  
の国いかに生きゆく  
小川和恵(新潟県)
- 35 どの児らも目をきらきらと輝かせ課  
外授業の駅前公園 佐藤古城(埼玉県)
- 36 段々と力の差の出る秋の空夫婦善哉  
人生たのし  
辻忠城(東京都)
- 37 病夫抱へわれは八十路の主婦なれば  
誇りをもたずば生くる能はず  
萬濃その子(神奈川県)
- 38 天空より落ちくる迫力水の音丸神の  
滝に両手を合わす 浜野タミ(東京都)
- 39 時雨止み枯れすすき原寂しくて足元  
の野菊秋においてけ堀  
高田深雪(新潟県)
- 40 すすき穂をかすかに揺らす風ありて  
望心地よき晩秋の午後  
田中豊恵(新潟県)

## 俳句

- 41 山林の崩壊戒しむ台風禍  
佐野澄江(山梨県)
- 42 十字架のごとく独りの稲架を組む  
渡辺嘉幸(東京都)
- 43 日本の天地せめ合ふ風の陣  
美濃部紘三(新潟県)
- 44 庭石に秋の夕陽のやわらかし  
今井岩夫(千葉県)
- 45 歩き遍路赤い橋やら青い海  
久保和友(滋賀県)
- 46 恋ふ唄か林檎の中に撥鳴りぬ  
関根千恵(埼玉県)
- 47 地雷無き上野の山の落葉踏む  
三ツ木宗一(東京都)
- 48 胸中のさざ波蕎麦の花ざかり  
橋本良子(埼玉県)
- 49 新聞に赤とんぼまだ止まりをり  
富樫和子(山形県)
- 50 太棹のをみなの黒衣萩月夜  
大曾根育代(埼玉県)
- 51 吾が余生「日々是好日」日脚おぶ  
小島美枝(新潟県)
- 52 笑窪まで妣を映すや後の月  
星野三興(新潟県)
- 53 敬老に競つて届く孫の品  
佐竹章(宮城県)
- 54 秋冷や駅でひろった国訛り  
早乙女文子(埼玉県)
- 55 晩学をこよなく愛でし秋日和  
神作泷江(埼玉県)
- 56 揺るるたび老い増しにけり鳳仙花  
土谷敏雄(秋田県)
- 57 歳毎に喪中ハガキが多くなり  
須澤重雄(長野県)
- 58 爆笑の果てのさみしき敬老日  
佐野和彦(静岡県)

- 59 小鳥来る母子で浸るワイン風呂  
檜山とり子(東京都)
- 60 旧友の訛り懐かし温め酒  
早川満(埼玉県)
- 61 この先は地図に無き道鱒雲  
古郡孝之(埼玉県)
- 62 水鳥や中洲に赤き足の見ゆ  
三津木俊幸(千葉県)
- 63 太郎冠者の声朗朗と秋はゆく  
井原毬子(東京都)
- 64 をとこ来て俄かななるハグ菊括る  
鈴木岑夫(千葉県)
- 65 夜目遠目佳き人多き十三夜  
渡辺茫子(千葉県)
- 66 公園の寂びしベンチや秋深し  
大場きよし(宮城県)
- 67 無人駅歩いて百歩秋山家  
菊池シユン(青森県)
- 68 ねむるの子の手よりポロポロ木の実落つ  
乾久子(滋賀県)
- 69 老いてなお今が青春雲の峰  
野木宗信(奈良県)
- 70 瓦礫瓦礫被災地に斑雪降る  
伊藤修敬(三重県)
- 71 鷹柱離れて法悦舞ふ一羽  
関谷秀二(愛知県)
- 72 年の暮記憶のかけら拾いけり  
長峰正晴(千葉県)
- 73 天皇家菊の御紋の輝けり  
宇田川正雄(埼玉県)
- 74 病人が集まるところ日向ぼし  
小井寒九郎(三重県)
- 75 コスモス祭中山道の間の宿  
木村真澄(埼玉県)
- 76 ちちははの小振りをなせる七五三  
千代田俳徒(東京都)
- 77 売られ行く馬のいななき鱒雲  
遠藤和彦(埼玉県)
- 78 露けしや野外駐車窓を拭く  
中嶋清子(佐賀県)
- 79 嵯峨花野とどころに隠れ寺  
炭崎博(滋賀県)
- 80 わが幸は身の丈ほどの花すすき  
川崎洋吉(福岡県)
- 81 小競りあひやがて整ふ鴨の陣  
田中昶(鳥取県)
- 82 コスモスや前世はにわとり空を飛ぶ  
布目雅之(埼玉県)
- 83 松茸のころがり出でし地方版  
柏田浪雅(東京都)
- 84 耳鳴りの気になり始む柚子湯かな  
椋本望生(大阪府)
- 85 膝高く足早にして天高し  
忍正志(兵庫県)
- 86 白壁に夕日の映く落葉樹  
木下精(大阪府)
- 87 瀬戸の海遠き月の出惚びけり  
河合ヤスエ(大阪府)
- 88 眼前の畦は修羅道居待月  
坂本正夫(千葉県)
- 89 友の死を知りて見上げる十三夜  
若月理依子(新潟県)
- 90 低く垂れ雨こぼさじと紅の萩  
水落重式(新潟県)
- 91 競技場トラック回る風と子等  
栗原黎(群馬県)
- 92 菊人形骨まで覗く審査の日  
北村純一(神奈川県)
- 93 曼珠沙華妻正論にあらずとも  
林克(福島県)
- 94 書き出しの一語にまどふ初日記  
阿部徳夫(宮城県)
- 95 蜘蛛の網の風に吹かれて蜘蛛の留守  
須田洋子(埼玉県)
- 96 草の絮記憶の地図に迷い込む  
小野寺裕子(宮城県)
- 97 界限に魚網の匂ひ十三夜  
下垣キミ子(島根県)
- 98 碁敵と本日休診秋うらら  
上村元義(神奈川県)
- 99 後継ぐは案山子だけよと兄夫婦  
佐瀬チエ子(神奈川県)
- 100 天空に太子の御座す月見能  
西川孝子(奈良県)
- 101 枯蓮や水面ひかりて広がりし  
原田かずゑ(千葉県)
- 102 満ち足りて眠るややこや後の月  
梶鴻風(北海道)
- 103 誓詞読むガーデンテラス秋気澄む  
大橋恒次(新潟県)
- 104 跣坐解けばおどろ冷気の蹠より  
吉田未灰(群馬県)
- 105 身の内に蜘蛛が糸張る無言館  
暉峻康瑞(鹿児島県)
- 106 豪快に生きて尚武の雨の通夜  
平賀田鶴子(愛知県)
- 107 秋中や明治の母はただ涙  
寺岡文生(静岡県)
- 108 民宿に偲ぶ昭和や茶立虫  
井上静夫(栃木県)
- 109 秋の蚊の雲隠れせし傷の痕  
緑川禎男(埼玉県)
- 110 一笑一若心に刻みうららかに  
義平弘子(大阪府)
- 111 鱒雲見知らぬ土地のうつくしく  
竹本美美子(新潟県)
- 112 運動を前に運動体育の日  
早矢仕邦夫(愛知県)
- 113 秋の風天主閣よりエレベーター  
村上千代(大阪府)
- 114 熟柿や年の差婚の気味悪さ  
加用章勝(千葉県)
- 115 父と子の語りのつきぬ菊贈  
油谷郷史(兵庫県)
- 116 秋澄みて自転車ペダル風を切る  
佐野しづ子(愛知県)
- 117 タッチする手と手の絆運動会  
清まさじ(静岡県)
- 118 コスモスやローカル線の風となり  
野村牟人(東京都)
- 119 十二月八日口は災禍の門  
湯前このゑ(東京都)
- 120 淡き色つつみてしばむ酔芙蓉  
堅田秀子(東京都)
- 121 秋雲や大草原の空碧し  
田中恵美子(山形県)
- 122 おさなごと競ふジャンケン小鳥来る  
紺谷睡花(東京都)
- 123 乾鮭の眼窩ふりむく海の飢え  
大西順子(東京都)
- 124 潮騒を遠く夜長の明月記  
新谷雄彦(広島県)
- 125 藁塚は秘密基地なり幼き日  
濱田イサオ(福岡県)
- 126 木犀の匂ひの中に挨拶す  
副島加代子(宮城県)
- 127 晩学の基本にかえる夜長かな  
津田忠彦(岡山県)
- 128 ほころびし秋の簾を客に恥す  
杉村美保子(岩手県)
- 129 連日でいつが本校運動会  
居原田連星(大阪府)
- 130 冬野菜おいしい季節まためぐり  
大橋絵代(千葉県)
- 131 巫子が舞ふ豊栄の舞秋高し  
青木凉子(埼玉県)
- 132 ひたすらに反抗する子秋夕焼  
江端秀子(愛知県)
- 133 黄落や人の背ばかり市巡る  
森川千英子(千葉県)
- 134 夕暮るる縁に鶴の白き糞  
木村貞恵(静岡県)

# 投稿作品



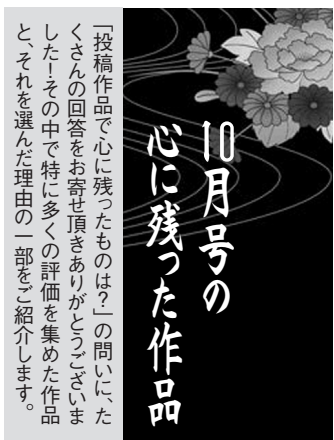
- 135 低気圧迫る夕べや秋刀魚焼く  
竹澤茂子(大阪府)
- 136 新米をおすそ分けして談笑す  
藤沢樹村(東京都)
- 137 蟬<sup>せみ</sup>茸の知るや今年の天を地を  
小島岳青(新潟県)
- 138 海上の爆ぜる花火に焼ける月  
岡村和郎(静岡県)
- 139 宵急に早まる町の海の秋  
安部哲(新潟県)
- 140 鴨撃の日の出待ちある仮設小屋  
大竹憲弥(新潟県)
- 141 踏み惜しむ常寂光寺夕紅葉  
磯部力(新潟県)
- 142 白萩の滝の如くに流れけり  
山崎紀久江(福岡県)
- 143 物思う色無き風のしのび寄り  
関忠恕(静岡県)
- 144 ものごとのひとつわからず菊の花  
杉本敬治(愛知県)
- 145 アリゾナの砂漠にもあり草紅葉  
山本直子(大阪府)
- 146 一人来て花野に捨つる涙かな  
堀田寿美子(北海道)
- 147 京菓子のほどよき甘み秋麗  
松尾康代(東京都)
- 148 稲刈る子運ぶ子干す子学校田  
小林七重(新潟県)
- 149 良き人生たつた一言言つて死の  
辻升人(東京都)
- 150 灯火親し「百歳」の詩集返し読む  
堀木和子(大阪府)
- 151 短日や頬を撫でゆく秋の風  
西條公雄(埼玉県)
- 152 秋の蝶旅を忘れて居るでなし  
浜田蛙城(静岡県)
- 153 大輪の菊の豊かさ老い忘る  
内河邦久(東京都)
- 
- 154 ひつち田のめおと鳥に水注ぐ  
村木尚(新潟県)
- 155 蒼天やななかまど燃ゆ北の町  
中西秀雄(東京都)
- 156 秋耕や被曝せし郷捨て切れず  
有坂馨園(福島県)
- 157 うたの旅夜長をひとりラジオかな  
五十嵐睦博(新潟県)
- 158 菊芋を代用食にして育ち  
田野井一夫(栃木県)
- 159 冬銀河来し方遠くなりけり  
青木ケン子(埼玉県)
- 160 十五夜の影に飾りし招き猫  
神一男(静岡県)
- 161 影を踏むだけで散りさう返り花  
今井勝子(新潟県)
- 162 秋桜揺れて亡き父来るやうに  
松嶋光秋(東京都)
- 163 こぼれ萩母と最後の箸と箸  
大久保アヤ子(東京都)
- 164 威銃水の面の動きけり  
平山千江(岩手県)
- 165 紅葉のガウン羽織り星置の瀑布  
有田裕子(北海道)
- 166 十代のおもかげひとつ花南瓜  
二瓶邦枝(埼玉県)
- 167 心経の「空」の余韻や冬の星  
大谷伊佐男(埼玉県)
- 168 妻癒えて湯豆腐確と噛みしめり  
村上克哉(東京都)
- 169 かしましく千切れ雲縫ふ雁の棹  
野原香雪(北海道)
- 170 たましいの遠く近くに吾亦紅  
棚橋麗末(東京都)
- 171 四百年城垣仰ぐ伊賀の秋  
中森儀雄(三重県)
- 172 鄙<sup>ひなべ</sup>辺には神仏もない秋の水  
浦橋渴雪(兵庫県)
- 
- 173 坐<sup>いざな</sup>らにもみじの放映かな  
藤井春三(埼玉県)
- 174 一坪を背負う成田や秋の空  
秋山貞治(千葉県)
- 175 妻に拾ふ銀杏落葉の二三片  
増田信雄(埼玉県)
- 176 稔れども不安隠せぬ案山子かな  
吉村充治(埼玉県)
- 177 友来たる夜長延々酒進み  
早川述史(愛知県)
- 178 減反のくさむら揺れてあきあかね  
山川みど利(山形県)
- 179 冬銀河降り来て街のルミナリエ  
石田宇梗(大阪府)
- 180 戦国の江のふる里いわし雲  
芋木匡子(滋賀県)
- 181 身の上に貫い泣きして秋の暮  
岩永登茂子(大阪府)
- 182 新松<sup>しんまつ</sup>子ゆれる小枝の日の光  
藤田昭代(岡山県)
- 183 秋霖や車夫駆ける背に「嵐」の文字  
勝田久美(大阪府)
- 184 痛みとるりハピリ室は菊日和  
山川幸子(東京都)
- 185 うろこ雲流れ流れて姿なし  
小原登志子(大阪府)
- 186 菊日和母の匂いの帯を締め  
高垣勝代(大阪府)
- 187 老犬に思惟あるらしき良夜かな  
清水喜代子(岡山県)
- 188 原発はお化けでしょうか文化の日  
中野勝子(鹿児島県)
- 189 茶の花や机上に偲ぶ志賀直哉  
中田文子(大阪府)
- 190 一片も零さず全天鱗雲  
湯浅芳郎(岡山県)
- 191 乙女らしうつむき羅漢に萩の風  
佐藤正子(福島県)
- 
- 192 秋麗や古き疊に史話秘めて  
矢野絹枝(東京都)
- 193 一直線秋空切るや飛行雲  
山田幸代(兵庫県)
- 194 黒鯉の重く沈みて冬支度  
中目サヨ子(鹿児島県)
- 195 満月に指さす少年罹災の地  
小山たけし(埼玉県)
- 196 贅沢にあらぬぜいたく栗おこは  
岩村昇(神奈川県)
- 197 大刷毛の白の一染天高し  
沢田稲花(山形県)
- 198 椎の実が語る歴史や記念館  
森ふく(千葉県)
- 199 白鳥の夕日に染みて集ふ湖  
小林正男(新潟県)
- 200 文化の日一人黙して東北へ  
安木沢修風(新潟県)
- 201 ヤッホーのこだま行き交う滝紅葉  
田島屋景子(宮城県)
- 202 鱈汁のたらの微塵を掬ふ夜半  
宮内孝子(東京都)
- 203 取り出せば何グラム程の秋憂  
村松知津子(大阪府)
- 204 木枯しが月だけ残して湖面掃く  
村岡盛英(群馬県)
- 205 案山子立つたんぼの向かふマンショ群  
西口東治(大阪府)
- 206 千里<sup>ちりほ</sup>浜の砂細やかや能登の秋  
羽根田明(神奈川県)
- 207 過ぎし日を耕している初便り  
池田岬(埼玉県)
- 208 地べた這う花に番の赤トンボ  
星一子(神奈川県)
- 209 錦秋の風ととのふる伊豆の山  
堀井醉人(茨城県)
- 210 秋の山車天を支へて廻りけり  
川口襄(埼玉県)



- 211 前略と書き出す夜の虫しぐれ  
名取美枝子(千葉県)
- 212 秋晴れの羽黒山頂法螺ひびく  
小林紀美子(東京都)
- 213 鳥賊で酌みむすびは佐渡の今年米  
清水伶一(神奈川県)
- 214 渡し舟棹さす土手の赤まんま  
古谷力(東京都)
- 215 薄紙をはがして美味の栗包み  
中村和弘(愛知県)
- 216 団栗や赤シャツ着せて犬はしゃぐ  
二ノ宮利江(東京都)
- 217 横文字のはびこる巷文化の日  
高杉杜詩花(北海道)
- 218 底紅や身仕舞正し散りゆけり  
岡村君枝(茨城県)
- 219 うかうかと長寿の仲間つくつくし  
竹内ハヤ子(埼玉県)
- 220 晩年の囲碁打つ父と秋日和  
中野豊彦(東京都)
- 221 この地球を包むベクレル神の留守  
菅井文男(新潟県)
- 222 身に沁むや旅立つという別れかな  
伊藤梅子(岩手県)
- 223 紅葉から見え隠れする五重の塔  
小野正光(宮城県)
- 224 小春日や和して歌えるわらべ唄  
齊藤安弘(神奈川県)
- 225 遠くなる父母の時刻金木犀  
木田亜津子(兵庫県)
- 226 櫻紅葉団塊世代皆定年  
中野博夫(埼玉県)
- 227 何げなく妣の部屋見る盆の里  
山崎吉晴(群馬県)
- 228 落葉掃きホッと一息草もみじ  
鈴木みえ(長野県)
- 229 銀杏を拾うはるけき日を拾う  
望月哲土(東京都)
- 230 汽車降りてバスに乗りつく花野かな  
五十嵐勝敏(新潟県)
- 231 西瓜食む遠き日のごと種飛ばし  
仁藤ひろし(埼玉県)
- 232 鎮魂の海忘れ得ず秋深む  
沢井博(群馬県)
- 233 姉川や優将なりし彼岸花  
中山日出子(大阪府)
- 234 秋惜む虫の音弱き散歩道  
長谷部喜代子(大阪府)
- 235 帳尻の合ひたる人や秋彼岸  
大窪美代子(大阪府)
- 236 窓外は黄のひと色や泡立草  
近藤美好(新潟県)
- 237 限りなき馬柵や流るる秋の雲  
鈴木清子(埼玉県)
- 238 はぐれ雁哀音しきり時指し  
佐々木トモ(宮城県)
- 239 新米を少し送りにて義理果す  
高井逸代(岡山県)
- 240 鴨の子の中の一羽の遅れがち  
高松ゆか(神奈川県)
- 241 冬のばら雨にぬれても紅のいろ  
高松愛(神奈川県)
- 242 信号はすでに青なり鯛雲  
村木友光(埼玉県)
- 243 フィナーレはよさこい踊り運動会  
石戸幸子(埼玉県)
- 244 神無月銀杏落葉濁水期  
五味田幸夫(神奈川県)
- 245 摺り足も消へて平成秋の暮れ  
橋本まこと(栃木県)
- 246 濁り酒ガイドブックにのらぬ町  
石井美智子(埼玉県)
- 247 山々の寝入る音する冬隣  
井田由利子(宮城県)
- 248 テレビなど消して軒端の十三夜  
池本勇(大阪府)
- 249 久しきや水のある池帰り花  
杉浦俊雄(静岡県)
- 250 床飾り茶掛けに替えて年用意  
延原令岱(岡山県)
- 251 青春の本を読み切り秋乾く  
倉岡依世(東京都)
- 252 更けるほど月の澄みゆく一葉忌  
大阿久雅子(東京都)
- 253 賓頭盧の膝の撫で艶時雨来る  
吉澤昌美(長野県)
- 254 鎮魂のトランペットや秋深し  
鈴木蝶次(宮城県)
- 255 柿たわわ母亡き生家素通りす  
門井美豫(埼玉県)
- 256 かしこみて長寿祈願や文化の日  
津布久信雄(東京都)
- 257 落穂拾ひミレーにあらざる群雀  
上谷すみゑ(神奈川県)
- 258 子の重荷になりにたくなくて着膨れる  
田中美智子(埼玉県)
- 259 聞き終えて友のシャンソン紅葉狩り  
柳澤京子(宮城県)
- 260 弾いてみる「エリーゼの為に」夜長かな  
浅野信廣(宮城県)
- 261 パスポートいつ使おうか柚子をもぐ  
北野耕兵(千葉県)
- 262 診察を終えバスを待つ秋日和  
久野克生(愛知県)
- 263 人の世は喜怒哀楽よおでん酒  
橋本世紀男(東京都)
- 264 鯛やきのぬくみ消毒液で消し  
中西孝子(兵庫県)
- 265 産土の菊生け癒やし頂けり  
石川郁子(埼玉県)
- 266 海光やくまなくおよぶ蜜柑山  
飯田ヒサ(神奈川県)
- 267 立冬や仮設の住み家春よ来い  
野中よしみ(神奈川県)
- 268 舵をとる千葉のどじょうの力瘤  
松田重信(埼玉県)
- 269 熊除けの鈴つけ登る山ガール  
高松秋良(群馬県)
- 270 私を忘れないよう鏡見る  
丸山芳夫(東京都)
- 271 さりげなく風邪を引くなどありがた  
い  
石原岳(群馬県)
- 272 幸せはここにあったと今日気づく  
辻直子(東京都)
- 273 老人を苛めたいのか字がこま  
中島久光(岩手県)
- 274 この世にもあの世にもない金の種  
諏訪杜夫(埼玉県)
- 275 列島は混迷の闇蟻地獄  
星野良一(埼玉県)
- 276 潮時を読んだ役者の名セリフ  
鈴木義雄(福島県)
- 277 親が居て妻や子がいて猪口がある  
竹村穂夫(大阪府)
- 278 測定器激しく揺れた床の下  
青木日出男(群馬県)
- 279 山水の美は衰えずわが故郷  
大江秋月(兵庫県)
- 280 親介護婚期逃した娘に詫びる  
諸橋文男(新潟県)
- 281 風の盆幼児も入り大笑い  
工藤昌見(山形県)
- 282 晩年の望みは現状維持となり  
守屋高雄(岩手県)
- 283 カーテンを変えて若く住む  
近藤はつみ(福岡県)
- 284 甲子園神宮チャンピオン札幌へ  
大川聡(新潟県)
- 285 人生譜台本も無い二人連れ  
羽田桐柳(群馬県)

- 286 踊り手の素顔が見えるわらざり  
金森チイ子(東京都)
- 287 うどん県さぬきうどんの観光地  
佐伯セツ子(香川県)
- 288 転居通知針山区から血池台  
森本遊笑(兵庫県)
- 289 悪友は老いた今でもなつかしい  
原田英一(千葉県)
- 290 妥協して影が薄れたミフエスト  
高柳閑雲(愛知県)
- 291 ナースにも営業用のある微笑  
山崎一嘉(愛媛県)
- 292 今日一日の自分に出会う朝がきた  
小山恵美子(大阪府)
- 293 ニュータウン向こう三軒老いばかり  
藤沢健二(千葉県)
- 294 人の目につかず土台のままがいい  
田澤宏(新潟県)
- 295 好き嫌いはつきり言える歳となり  
潮田春雄(千葉県)
- 296 健康のためのノルマが多過ぎる  
岡本恵(茨城県)
- 297 黄泉行きの往復切符買いたくない  
久本に地(岡山県)
- 298 虫たちも自分の道を歩いている  
松田義登(福岡県)
- 299 迷路から迷路へ深い霧だった  
安田翔光(香川県)
- 300 一年の煩惱洗う除夜の鐘  
大岩歌子(岡山県)
- 301 食べる夢ばかり見ている禁食中  
北川とこ(新潟県)
- 302 父の日に父との旅の無きを悔ゆ  
藤田三四郎(群馬県)
- 303 七十路に添うた処し方くらし方  
塚本良子(愛知県)
- 304 ゴーヤ植え一ケも食べず夏終る  
岡弘子(埼玉県)

- 305 地蔵さまドンダリたんぞ召し上れ  
中林恵子(大阪府)
- 306 目標の一步へ挑むストレッチ  
藤井碩子(山口県)
- 307 パレードで殺人兵器見せられる  
鈴木青古(茨城県)
- 308 母残すそれを恐れて入院中  
奥那於子(大阪府)
- 309 おおまかな予想で老後狂わされ  
佐野一江(静岡県)
- 310 政治欄読んで血圧高くなり  
増島淳隆(東京都)
- 311 ぬくもりが風呂敷にまだ残る愛  
野田明夢(新潟県)
- 312 慕われている幸福(ダイヤ婚)  
小西忠夫(鳥取県)
- 313 ハート形ふうせんから愛しくて  
坂詰進(福島県)
- 314 ひとつ覚えありがとうしか言わぬ老  
母  
石山幸枝(新潟県)
- 315 娘らを未だ案ずる母米寿  
小川よう子(大阪府)



「投稿作品で心に残ったものは」の問いに、たくさんのお返答をお寄せ頂きありがとうございます。また、その中で特に多くの評価を集めた作品と、それを選んだ理由の一部をご紹介します。

《大賞》

4 生ビールかざし心の栓を抜く  
渡辺嘉幸(東京都)

・日々のストレス解消をうまく表現していると思う。上山恵子(新潟県)・心の栓を抜く、ビール開ける時、ポーンと、

心の喜怒哀楽即ち煩惱を抜くか暉峻康瑞(鹿児島県)・ビールかざしが良い中川平治(東京都)・うつつ積した世の中の「心の栓」は当を得て妙。土屋喜雄(山梨県)・心の栓をぬく…表現が豊か。内河邦久(東京都)・猛暑の中、スポーツジムでヨガや水泳で頑張り、主婦の仕事も頑張り、夜ビールで。私も同感。岡弘子(埼玉県)・一日の仕事が終わってのビールの旨さがよく伝わって来ます。高垣勝代(大阪府)・心の栓、そのとおりだと。私の場合は抜けばなしたが。堀井醉人(茨城県)・仕事の終わったあとに飲むビール、心の安堵の様子が出ています。竹内ハヤ子(埼玉県)ほか

【自句自解】  
十年前妻を亡くして以来毎日が自由で気ままな生活を送ってきたが、ふり返ってみるといつの間にか八十五才にもなっていました。このままではいけないと自戒の日々であるが、夏の夕暮れともなると、そぞろビールが恋しくなる。ましてや、親しい仲間と飲むビールは格別である。何はともあれ乾杯といこう。八十過ぎてはビールは旨い。また乾杯!

《俳句》  
173 夏休み九九が云へたと走り来る  
佐伯はる(奈良県)

・孫か子かいづれも喜びの報告を受ける母か祖母の景色が良く分ります。三津木俊幸(千葉県)・夏休みが過ぎると急に成長する子供の一面をうまくとらえている。長峰正晴(千葉県)・お孫さんでしようね。九九が出来た喜びが目には浮かびます。大久保アヤ子(東京都)・一年生の孫だろうか、やっと覚えた九九。喜ぶ様がありありと浮かぶ。楽しくて明るい。村上克哉(東京都)・お孫さんで

しようか?得意になつて顔が見えるよ!!大昔の自分を思い出します。池田岬(埼玉県)・孫の成長を喜ぶ姿が見える。小野正光(宮城県)・みんなが通った童の道、そこに絵が浮かぶ。素直で良い句です。森崎榮久(岡山県)・簡潔でお子さんとの情景が見えてくる。田中美智子(埼玉県)・九九が言えるのは嬉しいもの。今は何年生で教えているのだろう。佐藤信(神奈川県)ほか

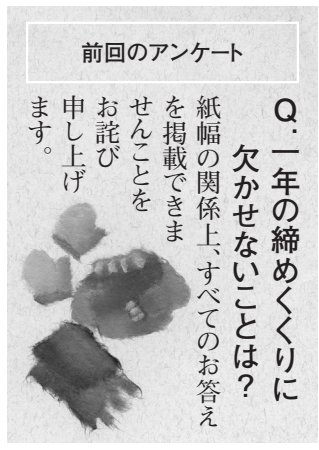
《川柳》  
242 何もしていない手袋テープ切る  
奈倉楽甫(愛知県)

・世の中をよく見ている句。汗水流し仕事などに携わった方はテープカットを遠くで見ている。石原岳(群馬県)・偉い人がテープカット、働いた人に失礼。中島久光(岩手県)・何もしない人ほど目立ちたがる竹村穂夫(大阪府)・テープを切るのはお偉いさん、出来るまでの作業は手出しはしません。大岩歌子(岡山県)・痛烈で爽快安部龍太(山梨県)・同感です。鏡たか子(山形県)

《短歌》  
270 艱難を越えて生地へ還る鮭実に故郷はありがたきもの  
佐藤古城(埼玉県)

・作者も老境に入られて故郷にお帰りになりたいのでしょう。「故郷はありがたきもの」に納得木村真澄(埼玉県)・東北の被災で避難している方々のことを思いました。高橋邦子(高知県)・鮭のふるさとをたずねて面白い作品だ。北岡晃(兵庫県)

※今後ふるってご投稿をお願いいたします!なお、メ切日を過ぎた作品は掲載できませんことお詫び申し上げます。



Q: 一年の締めくくりに  
欠かせないことは?

紙幅の関係上、すべてのお答え  
を掲載できません。  
せんことを  
お詫び  
申し上げます。

●お歳暮

- ・お世話になった方々へのお歳暮  
青木涼子(埼玉県)
- ・一年間の感謝「お歳暮」  
森川千英子(千葉県)

●クリスマス

- ・クリスマスパーティー ※句会のしめくくりです  
松嶋光秋(東京都)
- ・自分一人のクリスマスイヴ  
長尾俊彦(香川県)

●音楽

- ・シャンソンの発表会  
柏田浪雅(東京都)
- ・「第九」ステージ(合唱)で二十数年歌ってきたので毎年違う感動を覚えながら心の自分の一年を締めている  
北川とこ(新潟県)
- ・楽友と「第九」を熟唱すると一年を終えた感じがする  
古谷力(東京都)
- ・ある「カラオケ個人指導の会の忘年会」でその年の一番自分の気に入った曲を披露すること  
仁藤ひろし(埼玉県)

●旅

- ・犬と旅行  
関根千恵(埼玉県)
- ・気持ち納め旅  
杉本敬治(愛知県)

●家計簿

- ・家計簿の整理。台所をピカピカにする。と。気分爽快で年を迎える  
橋本良子(埼玉県)

・家計簿の集計でしようか

小川和恵(新潟県)

●作品を仕上げる

- ・独立書人団の書展出品作品を仕上げないと。一月早々(於国立新美術館)六本木  
津田忠彦(岡山県)
- ・川柳、大会、例会の締切、いつも気になります。余裕の投句をしたいものです  
松田義登(福岡県)
- ・十カ所の投句先、すべての投句を済ませること!  
安田翔光(香川県)

●作品整理

- ・この一年作句した(川柳)ものを整理・保存・綴じたり表紙を作ったりする楽しみ  
石原岳(群馬県)
- ・一年間の自分の短歌をまとめること  
今井忠一(東京都)
- ・川柳の年間まとめの小冊子を手づくりで仕上げる  
藤井碩子(山口県)
- ・一年間の俳句作品の整理  
沢田稲花(山形県)

●写真整理

- ・アルバム of 整理  
木村真澄(埼玉県)
- ・写真の整理、旅先のスナップや行事参加の写真をコメントをつけながら整理し一年をふりかえる  
岩崎令子(大阪府)

●正月準備

- ・締め縄作り  
竹村穂夫(大阪府)
- ・手作りの松飾りです。それから結婚以来妻の実家で行っている餅搗きです。四十年一度も欠かしたことはありません  
井上静夫(栃木県)
- ・しめ飾り作り  
濱田イサオ(福岡県)
- ・そば作り、もちつき、こんにやく作り、など  
木村貞恵(静岡県)
- ・新年を迎える準備として門松飾りと前に供える鏡餅を創ることです  
中村和弘(愛知県)

「お屠蘇の用意」大掃除もお節料理も省略してもこれだけは!

木田亜津子(兵庫県)

●おまいり

- ・社寺への参拝: 今年起きた震災を初め天変地異で被害された方々の鎮魂  
早川満(埼玉県)
- ・12月31日午後6時神棚・仏壇・床間掛軸・三宝への供え物、灯明、家族で一年間の感謝参拝を行います  
早川述史(愛知県)
- ・神棚と仏壇の掃除(心がすっきりいたします)  
大谷伊佐男(埼玉県)
- ・地元の神社に一年間息災であった事のお礼参り  
小川よう子(大阪府)
- ・勿論先祖のお墓と仏壇のおそうじです  
阿部澄江(宮城県)
- ・仏壇の中の仏像や仏具をきれいに磨くこと。元旦のお灯明に輝きます  
岡村君枝(茨城県)
- ・墓参り(墓を洗い周辺を掃除して帰ります)  
伊藤修敬(三重県)
- ・父母の墓参り  
倉岡依世(東京都)
- ・庭木の手入れ完了しないとな  
寺岡文生(静岡県)
- ・庭木の刈込み手入れ、趣味が加齢と共に大仕事に:  
西條公雄(埼玉県)
- ・千両の実を野の鳥から守るため早目に剪り、正月を待ちます  
山本せつ子(鹿児島県)
- ・冬構  
星野三興(新潟県)
- ・冬囲い(植木の)  
野田明夢(新潟県)

●掃除

- ・身辺のお掃除  
道給一恵(埼玉県)
- ・自分の書斎の清掃。本の波にのみこまれそうです。十二月はこれが待っています  
梶鴻風(北海道)

・家じゅうのガラスを磨く大掃除

堅田秀子(東京都)

- ・一人身であるため年に一度庭や家の大掃除です  
関子利明(兵庫県)
- ・身辺整理。本を売る、部屋のけもの道を解消する  
大西順子(東京都)
- ・年齢を経ると一年が短く感じるので年末年始の行事にも関心がうすれます。しかし年末の大掃除は何とかやっています  
藤沢健二(千葉県)
- ・大して広くもない家ですが一年の埃を払って新年を迎える、これです。新しい英気が生まれます  
田澤宏(新潟県)
- ・「煤掃き」家の内外の大掃除、特に神棚・仏壇など一年を感謝し念入りに行う  
田野井一夫(栃木県)
- ・年老いてあとは栢に入るだけ。身辺整理を家内にせかされている。ときめかないものは捨てること!  
浦橋克行(兵庫県)
- ・十一月一日より家の中の引出しを一日一ヶ所整理すること  
竹野紀子(東京都)

●障子貼り

- ・障子の張替え(気分が一新いたします)  
美濃部紘三(新潟県)
- ・居間の障子貼り  
部屋が明るくなる  
栗原黎(群馬県)

●年賀状

- ・何もかも泥棒をつかまえてから縄をなうような暮らし、せめて年賀状だけは書きたいがどうなることか  
早乙女文子(埼玉県)
- ・もう軽くなろう(虚礼廃止)とする毎年なのですがやはりキリつけないと年を越せないですね  
鈴木岑夫(千葉県)
- ・新年のご挨拶: 年賀状を筆でしたためる事です  
阿部徳夫(宮城県)

# A Q U E S T I O N N A I R E

- ・知人に発送する年賀状ですね。待つて居る人がある  
吉野成行(愛知県)
- ・年賀状 それも年末ざりざり  
中野豊彦(東京都)
- ・やはり年賀状書きは私の一年の締めくくり。一大イベントです  
中野博夫(埼玉県)

## ●日記

- ・毎日書いている日記のページをめくり一年の想い出を作る 諸橋文男(新潟県)
- ・日記の最終文に終止符を打つことです  
吉田未灰(群馬県)
- ・十年連記の日記を書き始めて七十六才の春を爽快に迎えることしたい  
有坂馨園(福島県)
- ・二〇二二―三年連記の日記を選ぶこと  
森ふく(千葉県)
- ・大晦日の日記をつつがなく書くこと  
増島淳隆(東京都)
- ・日記の最終ページに「やれなかったこと」を列挙し、次の年には実践させようという気持ちで切り換えること  
齊藤安弘(神奈川県)
- ・一年の日記を読みふり返る事  
坂詰進(福島県)
- ・日記を読み返す  
村木友光(埼玉県)

## ●漬物

- ・沢庵を漬け込むこと今井勝子(新潟県)
- ・畑に作っている無農薬有機野菜の白菜の漬込みと忘年会 湯浅芳郎(岡山県)
- ・越す冬の野菜とたくわんを漬け込む  
近藤美好(新潟県)

## ●酒・酒づくり

- ・もちつき終りの清酒一杯  
中川平治(東京都)
- ・年越の一杯(酒) 清水伶一(神奈川県)
- ・ぐいのみ純米新酒を注ぎお月見台にて浅酌することです 北野耕兵(千葉県)
- ・柚子酒づくり 旨いですよ…  
堀井酔人(茨城県)

## ●忘年会

- ・仲間との忘年会、毎月飲んでいても「忘年会」という名で飲まない  
長峰正晴(千葉県)
- ・銀座の洋食店で独杯をすることです  
稲葉民雄(千葉県)
- ・家族で総会を兼ねた忘年会  
松尾康代(東京都)
- ・山での忘年会 千木良宣行(埼玉県)
- ・句会のあとの忘年会  
羽根田明(神奈川県)
- ・やはり基本の句会の忘年会、有志で思いやり楽しむこと 星一子(神奈川県)
- ・定番の忘年会。何やかやと口実をつけて二回、三回と…  
佐藤信(神奈川県)

## ●ふり返り

- ・今年の我が家の十大ニュースを掲げる  
今井岩夫(千葉県)
- ・心の裡の煤払い。これでまた次の年も…  
松田重信(埼玉県)
- ・自身の十大ニュースのまとめ  
三津木俊幸(千葉県)
- ・感謝・感動・関心の三カンを王で少しでも生きることができたか、反省すること  
水落重式(新潟県)
- ・「時は待たない腐らない」座右の銘反省することにつきます  
佐藤茂三郎(千葉県)
- ・1、四方に感謝の合唱2、年最後の一句を詠むこと3、熱燗で乾杯  
内河邦久(東京都)

## ●紅白

- ・紅白を見ながら年越しソバ  
中島久光(岩手県)
- ・一年のほこりを取払い、風呂に入りNHKの「紅白歌合戦」を見るコースですね  
布目雅之(埼玉県)
- ・紅白歌合戦観戦(ぼくは「年忘れにっぽんの歌」派なので、結局最後まで付き合っていくことになる)。 神田九十九(東京都)

- ・やはり片付けとそうじをしてお節を作って年越しそばを食べて紅白を観ます  
小山恵美子(大阪府)

## ●そば

- ・田作りを作って年越しそばを半玉ずつ食べる  
木下精(大阪府)
- ・年越しそばを食べ、初詣のスケジュールを組んでリユックにカメラ等を詰め込むこと  
居原田連星(大阪府)
- ・年越しそばはただきながらの除夜の鐘  
大橋絵代(千葉県)
- ・自前の手打ち蕎麦を身内に配って残り二人でTVを見ながら食べる大晦日  
中西秀雄(東京都)

## ●おせち

- ・一人暮らしの娘が正月に来て楽しみにしている「手作りのおせち」を一通り作ること  
紺谷睡花(東京都)
- ・帰省する息子と手作りのおせちを囲むのが習慣になり又たのしみでもありません  
堀田寿美子(北海道)

## ●もち

- ・餅をつかないと…大場きよし(宮城県)
- ・我が家では、押し餅を切るのは私の担当  
遠藤和彦(埼玉県)
- ・鏡餅 藤沢樹村(東京都)
- ・年末に弟の家(実家)に集ってするお餅つき  
堀木和子(大阪府)
- ・以前は重箱の中身作りでしたが最近はおもちゃでお供え作り 山田幸代(兵庫県)

## ●その他

- ・こどもたちの帰省 富樫和子(山形県)
- ・秋田の鱒漬を漬けること  
土谷敏雄(秋田県)
- ・チャリティー作品の制作  
須澤重雄(長野県)
- ・年忘れお楽しみ麻雀を我が家で友を呼んで  
辻直子(東京都)
- ・来年の行事予定表の完成  
炭崎博(滋賀県)

- ・健康診断。一年の体の御苦労を祝つて  
北岡晃(兵庫県)
- ・利根の水で鉄を洗うこと  
坂本正夫(千葉県)
- ・大晦日の夜、「塩鮭を一口でも食べて年越し」が、子供の頃から家訓でした  
若月理依子(新潟県)
- ・長いじゅばんの衿のつけ替え  
佐々木都(長野県)
- ・年をとると年末に無理をして正月にねこむではつまらない。何もしないのが一年のおさめ 佐伯セツ子(香川県)
- ・大震災の年。生涯の句集に残せる鎮魂の一句を詠むことでしょうか  
小島岳青(新潟県)
- ・来年のカレンダーを決める  
岡本恵(茨城県)
- ・「宝くじ」という夢を買う  
山本直子(大阪府)
- ・年初の確定申告のまとめ、庭の剪定  
塚本良子(愛知県)
- ・石油ストーブの灯油の充填、正月一日にゆつくりするため 濱崎祥子(鹿児島県)
- ・読み残した書を何としても読むこと  
小山たけし(埼玉県)
- ・黒豆を一日がかりで煮ます  
中山日出子(大阪府)
- ・初吟行と初句会の原稿の用意  
大窪美代子(大阪府)
- ・古書店巡り、道すがら物思ひ、ゆく年を一日楽しみます 野中信夫(東京都)
- ・百人一首をして楽しむ  
森崎榮久(岡山県)
- ・年越し番組のTVを観ながら年越しうどんを食べる事です 濱田深雪(新潟県)
- ・寝具の手入れ 上谷すみ多(神奈川県)
- ・来る年の干支の動物のぬいぐるみを作る  
田中豊恵(新潟県)
- ・礼状と共に人から借りた本の返済をすませる  
飯田ヒサ(神奈川県)

## ゆうじろう 「湯時郎」さんの川柳を募集!

いつも弊社に多大なご協力をいただいている、アルバムを中心とした情報生産企業(株)博進堂さんには「ぴいくらぶ」というブランドの、おもしろカレンダーが企画・制作・販売されています。その商品の1つ、お風呂用カレンダー「湯時郎」では2013年版カレンダーに掲載される川柳を募集しています。一日の疲れを癒すお風呂でのひと時、ご自分の作品が掲載されているかもしれないカレンダーがあればより楽しめますね。

### お風呂用カレンダー「湯時郎」

雑学や手話、安心良品、江戸しぐさをはじめ、歴史、体の不思議など、知って得するおもしろ情報が満載。さらに2012年版は新コーナーとして日本の祭りやしきたり、日本語に関する知識など、日本文化や伝統に着目した情報が登場。バスタイムを有意義に過ごし、心と体をみがける週めくりカレンダーです。卓上・壁掛けの2WAYタイプ。水に濡れても大丈夫な耐水性紙を使用しています。



### ●川柳募集要項

テーマ:「未来」(未来をテーマに一句詠んでください。)

締め切り:2012年2月29日消印有効

優秀作品:優秀作品は2013年版「湯時郎」に掲載され、「湯時郎」一冊をプレゼントさせていただきます。

応募方法:官製ハガキ、ファックスにてお送りください。

(郵便番号、住所、氏名、電話番号、ペンネーム希望の方はペンネームも記入してください)

あて先:〒950-0807 新潟市東区木工新町378-2

(株)博進堂ぴいくらぶ「湯時郎川柳(KDIR)」係

ファックス:025-271-2676

## 「花咲かそうプロジェクト」 へのご協力ありがとうございました

東日本大震災を受け、弊社でも少しでもできることを具体的な形で示していきたいと「花咲かそうプロジェクト」と銘打ち、その第一弾として①2012年手帖②自由手帖③手ぬぐいの3つを制作・販売いたしました。11月中旬に発送を完了し、皆さまにご協力いただいた売上の一部を東日本大震災義援金として日本赤十字社へ寄付させていただきました。「小さいことでも、できること」これからも続きます。



## 食に関するミニエッセイを募集中

先回の10月号で初お目見えした『滋味しみじみ』のコーナー。忘れられないあの時、あの人と食べた味、自慢の郷土料理、記憶に封印されたあの味…等、とっておきのエッセイをお寄せください。採用の可否については、誠に勝手ながら弊社に一任させていただきますようお願いいたします。400～500字の原稿をP16下記の住所宛てに封書かメールにてお送りください。おいしいお話、お待ちしております♪

## ポストカード好評発売中!

毎回ご好評をいただいている当社のオリジナルポストカード(1組8枚入り500円×各シーズン)。今回は冬バージョンより「イチイの実」を同封いたしました。お気に召していただいた方は、同封のアンケート用紙にご希望の季節、セット数を明記のうえ、**必要金額分の切手と一緒に封書にてお申し込みください。**



### Q.これをしないと一年が締まらない

木戸 敦子



31日刺身、のっぺ、鮭と酒等食しつつ一年を省みることなく鴨汁で締め二次会は実家へ。酒豪の兄嫁三人とゴジラVSモスラ状態。締まらぬまま重～い感じで初日が目に沁みる例年。

古川 久美子



大好きなDVDを見ながら、おうちでゆっくり過ごすのが毎年の恒例行事となりつつあります。気が付くと年が明けている(笑)。今年はお歩いて大変な目に遭いました(笑)。

菅 真理子



家族で夕食をかこみ、「今年も一年お疲れさま～」と感謝の乾杯をすること。たりと元賀状が書き終わらなくとも、たとえ掃除が行き届かなくとも(毎年か)、これだけは恒例です。

仲由 真実



祖母宅で夕食をいただき、紅白歌合戦をみる。年越しの瞬間は、大掃除の真最中…なことが多い我家。今年は掃除を早めに終わらせてゆっくり過ごしたい。

上村 真智子



毎年毎年吞んでくれて紅白歌合戦見て、年越しライブ見て、カウントダウンして蕎麦食べて寝ます。たまに温泉行ったり、スキー場とか、家じゃないところで新年を迎えたい…

金子 ゆり子



年末は掃除も料理も楽しくできます。なぜなら子どもが帰ってくるので。でも今年は娘は帰らず、残念。そして新年の早朝歩こう会のために、早く寝ます。

石山 由希子



紅白歌合戦。歌が好きなのでこれがないと年が終わらない。子どもの頃は藤山一郎さんが締めてくださった一年。夜更かしのできる楽しい日でした。

山田 千秋



床のワックスがけ。なにかこれだけは、年末にするとこだわっています。これって達成感あるんですよ～(笑) そのあとは家族だけで年越しそばと鮭で新年を迎えます。

吉田 瞳



結月ちゃん、日々成長中! これから3ヶ月検診へ♪

●お客様の『リレーエッセイ』

〈暮らしの中の花〉

黒川道彦

(東京都・新宿区)



彼岸花  
ひがなばな

今年に入ってから、直ぐ息切れがしたり、動悸や胸に鈍痛を覚えた。主治医に相談すると、「ここ暫く検査をしていないから、一泊二日で検査をしましょう」と仰有った。入院は気乗りしなかったが、それに従い予約をした。八月の句会で、検査の為に入院したその結果を皆さんに申し上げた。冠状動脈の一本が九十九パーセント狭窄していると医師に状況を告げられたこと、血栓に依り狭まった血管を拡張するために、又入院して来るのでと、申し上げた。お大事にと皆さんから言われて努めて笑顔で会を辞したが、内心は心配であった。冠状動脈の狭窄部分から、施療の際剥がれた血栓の一部が回り回って脳に達して詰まれば、脳梗塞その他大腿部の動脈瘤を起こすリスクなどを説明されたための心配である。

そんな折りにプランターの彼岸花が咲いた。例年なら九月の彼岸頃から咲くのが三週間も早く開花したので奇異に感じたのである。西洋人はこれを花が咲いた後に葉がでるために、マジックリリーと言ってその燃え上がる様な色と共に賞賛する。逆に我が国では曼珠沙華(梵語で赤い花と言う意味)は兎も角、死人花、幽霊花、捨て子花、天蓋花、葬式花、蛇花、ほとけ花などとあまり印象の良い名が付けられている。私の母の生家の群馬県安中市板鼻ではジャンボン花と言って子供達は忌み嫌っていた(ジャンボンとは葬儀で出棺の際に鳴らす銅耀の音)。終戦直後なので、進駐して来たアメリカ兵がこれを運転する

ジープに喜んで飾っていたら、衝突事故で即死して、そのジープの周囲は、彼岸花とGIの血で真っ赤になっていたとか言う話を昔聞いた。そんな不吉な話を思い出して不安な気持ち少し起こっていた。時期外れに咲いた花こそ迷惑な事である。学名はリコリス・ラジアータで球根にリコリン等のアルカロイドを含み、有毒である。然し漢方薬や民間療法で、球根を搾り下ろして炎症、腫れ物、防虫に効果があると用いられたと言う。昔、飢饉の時に食用にされる救荒作物だったと言う。球根を搾り卸し、何回も水で晒して得た澱粉を食用に供した。毒草なので野生動物に食害されないと言う利点と引き替えに、食用にするには大変に手間が掛かったのである。あのように群生して開花するのに、結実しない。染色体数が基本数の三倍体である事に起因するのだという。

近縁のコヒガンバナは二倍体で結実するそうであるが、私はまだ見たことがない。最近、中国産のヒガンバナは、日本産の物より一ヶ月ほど早く開花すると言う文献を読んだ。そうすると、私の早咲きの個体は八月中旬に開花したので、中国原産種かなと思った。これも二倍体だとのことで、改めて観察したら青い実が五箇ほど付いていた。熟したら播種して育成して見ようと思っているが、開花まで存命出来るかどうか、自問自答している。花言葉は「悲しい思い出」「情熱」「諦め」「独立」「再会」、でも好きな花である。



# 新潟ぶらり

## ★新潟県立図書館からの景色―鳥屋野潟

昨冬、新潟県立図書館に母と行った。帰りしな母が「あの窓からの景色はいいね。まるで大きな日本画みたい」と言った。私が調べ物をしている間、本ではなくずっと景色を見ていたのだ。「来年の冬には、この図書館からの景色を紹介しよう」と思った。

当図書館は、鳥屋野潟に隣接している。鳥屋野潟というのは、新潟市のほぼ中央部の南側にある潟で、新潟に残る潟のうち、最も古く最も大きい潟といわれる。

新潟の大地は、信濃川と阿賀野川から運ばれてきた土砂が堆積してきた。その土砂と、強い季節風の運ぶ海砂によって砂丘が形成された。砂丘の間には無数の潟ができ、そのいくつかがこうして現在まで残っているのだという（鳥屋野潟は東西に長い潟で、長軸が二・五キロ、短軸が〇・三―一・〇キロ。湖岸線は七・七キロ、面積は一・六七平方キロメートル。平均水深は一メートルと浅い）。

当図書館からは鳥屋野潟をゆっくと眺めることができる。潟の周囲には木々があり、遠く向こう岸には新潟市街を望める。奥行きを感じ

られる景色というのは、心までのびのびする。いい具合にソファがある。図書館の窓は広くつくられており、大きな額縁だ。迫力が感じられるほどに大きく成長している木々。葉が落ちて真っ黒になったら、雪が降ったら――確かに大きな絵画のように見えることだろう。

「日本画」が見られる季節が、もうすぐやってくる。

参考：『新潟市史資料編12 自然』新潟市史編纂自然部会、新潟市  
『鳥屋野潟讃歌 白鳥S子よ』宮村堅弥、鳥屋野出版

（菅真理子）



新潟県立図書館

〒950-8602

新潟市中央区女池南3-1-2

☎025-284-6001（代表）

## ★越後KOME&SAKE交流館ナジラ

今年も残すところ後わずかとなった。お世話になった方に感謝を伝えて締めくくりたい。

年末年始にはたくさんの人で賑わう新潟総鎮守白山神社。そのシンボルである大きな赤い鳥居を出ると、一番町から十三番町まである古町通りにつながる。その「上」<sup>かみ</sup>の方、一番町から四番町は上古町商店街（通称・カミフル）と呼ばれ、周辺の大聖店に負けず、活気を取り戻している。

お酒好きの知人に贈りものをしようと思い、カミフルに出かけた。アーケードを通して聞こえる音楽に耳を傾けながら、ゆったりとした気分ですり外れているので車の通りもほとんどなく、それだけですれ違う人皆が落ち着いてみえる。

カミフルにあるお店の一つ「ナジラ」に入った。

「ナジラ」では新潟のお酒やお米の他、それらにまつわるお土産が紹介されている。県内には95の酒蔵があり、酒処新潟として知られている。お酒好きの方にはたまらないであろう新潟に住んでいるながらも詳しくない私のようなものでも、スタッフの方が親切に相談ののってくれる



ので安心だ。吟醸や純米、本醸造のお酒など詳しく説明していただいた。お土産用に持ち帰りやすい小さいサイズも選ぶことができる。高価な大吟醸も小さいサイズであれば選べる。おちよこの置かれているお酒は試飲できるのがうれしい。試飲のたびに店内にはふわっとした香りが広がる。また、酒蔵・お酒分布マップや方言の紹介、新潟にまつわるパンフレットが展示されていて眺めるだけでも楽しめそうだ。

上古町には500メートル続く浴道に、歴史ある老舗から新しく個性的なお店が100軒も連なっている。まだまだ興味深いお店や神社、お寺がたくさんある。また機会があれば皆様にご紹介させていただきたいと思っている。そして新潟にいらした際には温故知新のおしゃれで落ち着いた町、カミフルにお立ち寄りいただきたい。なじら〜（いか）がでしようか。（仲由真実）

## ロマンスグレー

中西夕紀

嘆くまじ欺かれても枯梗は紺

楠本憲吉

昭和五十年、クスケン五十三歳。一月新潟、長野行き。二月大阪で講演。三月弘前行き、京都で湯川秀樹、関牧翁と録画取り。『デンティスト』に「日本縦断シリーズ、齒科風土記」を連載開始。五月カナダ行き。六月萩行き。九月沖繩から香港へ。そして高知行き。十月太陽社『戒食録』出版。小倉テレビ収録。十一月柴田書店『大阪・神戸味めぐり』出版。永田書房句集『孤客』出版。

このように、旅、講演、テレビ出演、本の出版と多忙を極めた生活が続き、まさに脂の乗ってきた時期。これから十年ほどがクスケンの超多忙な華の時代だ。

句の中の恋も、もてるばかりではなく、少々かげりが出てきて深みを加えている。桔梗はクスケンの凜とした心持を表しているようだ。若い頃の自信たっぷりな恋句より、こういう負を描いた恋の方が、読み応えがあるのも事実。寂しげなところが女心を揺さ振る句だ。

寒く剃り寒く咳やく「還暦」か

このまま老ゆれば酒・唄また恋しかも恥

還暦になってももてている様子だが、かなりの売れっ子ゆえ疲れが溜まっているらしい。わが町の図書館のパソコンで楠

毎回、大反響の「クスケン」に関する中西さまのエッセイも残念ながら今回が最後。同時代に生きていたら一度はお目もじいだきたく候、といった人間味あふれる「クスケン」なのでした。次回からは角川短歌賞を受賞された歌人に「ご登場いただきます」。

本憲吉を検索すると、『男の台所』『女ひとりの幸はあるか』『味のある話』『洒落た話のタネ本』など味・食・女という文字がついた都会的でおしゃれな、「なだ万」の専務取締役らしい題名の著書がズラズラと並ぶ。

酔いという過去 流木に似て非の黙もた

六十三歳。この頃多分健康上の理由から禁酒して、すでに酔いは過去のものになっている。酔って味わつた後悔を恥と描いた作者だが、そこに人間臭さがあり酔えない寂しさはそれ以上のもの。ちよつとクスケン、そんな弱気にならないで。人生の寂しさを描くには早すぎる。

彼岸過迄逢えぬ別れの指からます

「蜜あげます」と花が囁くある晴れた日

落葉従え長身K氏坂足早や

昔あるひとに捧げし冬すみれ

銀色のワルツ踊ろうよ人妻、夏

同じ頃の句だが、ますます多彩。当時ロマンスグレーと言われた憂いとかげりが読み取れる。男の恋歌を長年詠ませた正体を、ダンディズムと言う人もいる。クスケン亡き後、女より、男にもっているのではなからうか。

### ●プロフィール

1953年9月4日、東京に生まれる。昭和55年俳句を始め、同56年「岳」に入会。同57年「鷹」に入会し、藤田湘子に師事して15年間学ぶ。平成8年「晨」同人参加。宇佐美魚目の吟行会に学ぶ。同17年同人誌「琉」創刊同人参加。「岳」「鷹」「晨」同人を経て、同20年「都市」創刊主宰。

2011.12. vol.59 (2011年12月10日発行/隔月発行)  
●発行・印刷/株式会社ミュージズ・コーポレーション  
〒950-0801 新潟市東区津島屋7-17  
TEL 025-250-9555 FAX 025-250-9550  
0120-819-395  
e-mail odp@eseihon.com / HP http://www.eseihon.com

### 編集後記

「一年の締めくりに欠かせないこと(P11)」を読むと、全国各地の皆さんの日々のたたずまい、風土、息づかいのようなものを感じる。一度弊社で本を作り、以後何かと気にかけて応援くださった桑名市の伊藤修敬様が亡くなられた。「今年もまた贈るね」と電話でお話し、そのみかんが届いた三日後に、「戦争でガダルカナルへ行く船で新潟の人と懇意になり万年筆と手紙を預かったが、船が沈んで渡せなくて胸が痛む。新潟には何かと縁がある」とおっしゃっていた。人とのご縁によって息災に終えられますありがたさを、殊更に感じる歳のはずです。季節は廻ります。一年間誠にありがとうございました。(木戸敦子)